

カキ「東京紅」の着果部位3枚摘葉による果皮の着色効果

池田行謙・河野 章
(園芸技術科)

【要 約】カキ「東京紅」は、10月上旬に果実の着果部位の葉を3枚摘葉することにより、果皮の着色が促進され、収穫は3日早まる。また、赤道部の着色促進により、外観品質が向上し、収穫の適期判断が容易になる。

【目 的】

カキ「東京紅」は、収穫時の果皮色の紅色が濃く（果頂部のカラーチャート(C.C)値8.0以上)、高糖度（糖度17度以上）が特長の東京都オリジナル品種で、果実品質に優れる有望品種として都内での普及が進んでいる。しかしながら、日照条件の優れない環境では、果頂部以外の部位の着色が遅れ、収穫の適期判断を難しくしている。そこで、収穫前摘葉処理が果実の着色促進に与える効果を明らかにする。

【方 法】

灰色低地土圃場に植栽された「東京紅」6年生を3樹供試した。試験区は、摘葉処理区と無処理区（対照区）の2つを設定し、処理は1区1樹5果とした。処理日は、平年の収穫始期である10月下旬の概ね20日前となる10月7日に設定し、果実を覆う葉を3枚摘葉した（図1）。摘葉後は、約3日間隔で果実の赤道部および果頂部の果皮色値（C.C値）を測定した。

【成果の概要】

1. 摘葉処理による着色促進は、処理直後から果実赤道部において確認され、処理後10日後には無処理区に比べて果皮色値で0.5高くなった。その後は、果頂部、赤道部いずれも、ほぼその差を保って推移した（図2）。
2. 果頂部のC.C値が収穫の目安となる8.0以上に達したのは、処理区では11月15日（C.C値8.3）、無処理区では11月18日（C.C値8.0）であったことから、摘葉処理により、収穫時期は3日早まった（図2）。
3. 赤道部の果皮色は、11月15日、18日、21日の3調査日において、処理区では、7.7、7.9、8.1と無処理区と比べて高く推移した。特に、処理区では11月21日に8.0以上に達したのに対し、無処理区では、8.0に達しなかった（図2）。
4. 摘葉処理による果皮障害果や病害虫果の発生等は確認されなかった（データ省略）。
5. まとめ：10月上旬における「東京紅」の果実の着果部位3枚の摘葉処理は、果実の着色促進に有効である。これにより、収穫時期を3日早めることが可能になる。また、赤道部の着色値が8.0以上に達することにより外観品質が向上し、収穫の適期判断が容易になる。なお、摘葉枚数や処理時期の違いが糖度などの果実品質に及ぼす影響については、次年度に調査を行う予定である。



図1 「東京紅」の着果部位の葉を3枚摘葉した様子（左：処理前，右：処理後）

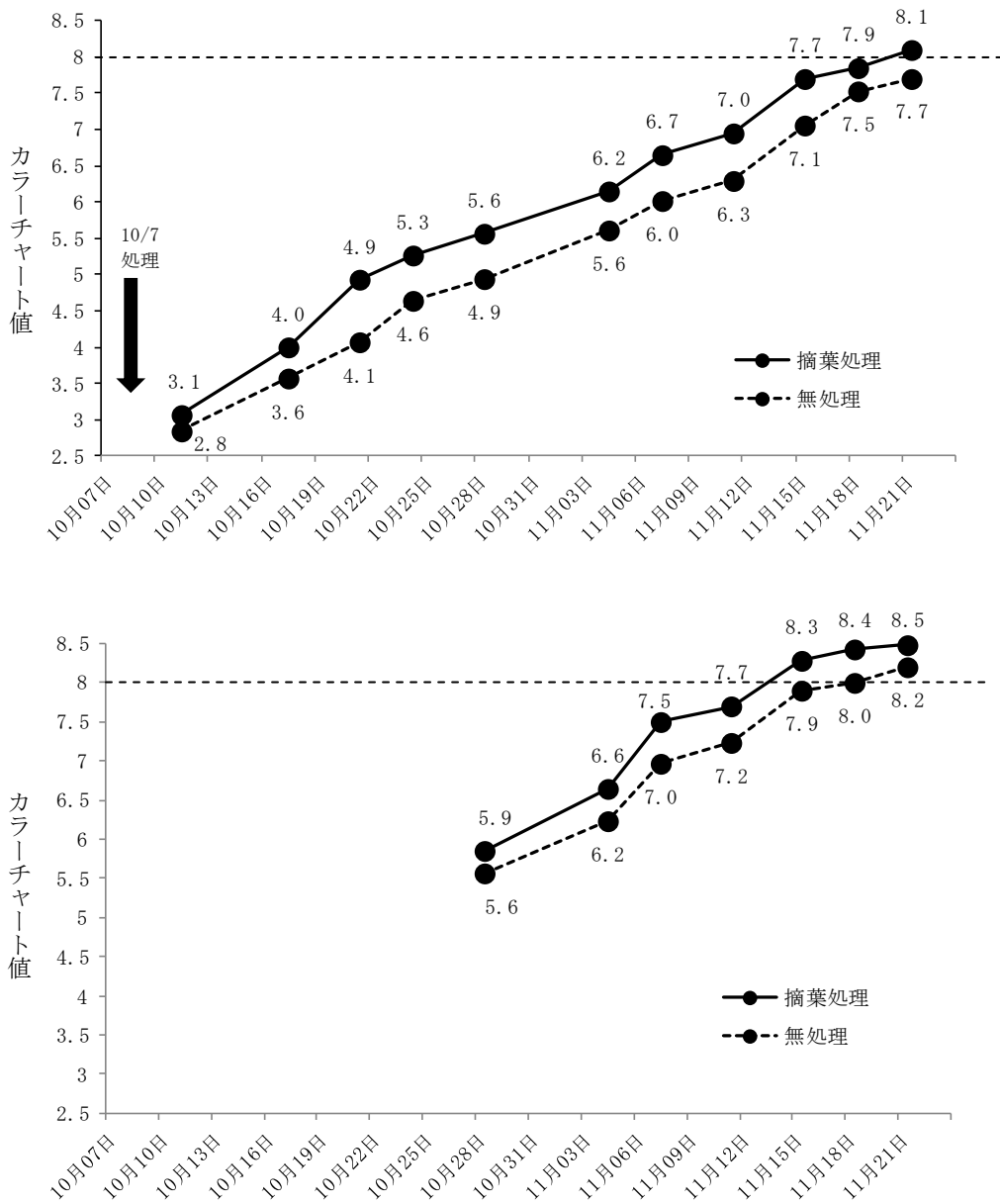


図2 「東京紅」の10月7日摘葉処理による果皮色推移
（上：赤道部，下：果頂部）